

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 ( 共通 )

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 5 年 6 月 2 8 日現在

機関番号 : 3 2 6 2 8

研究種目 : 基盤研究(C) ( 一般 )

研究期間 : 2019 ~ 2022

課題番号 : 1 9 K 1 2 6 8 7

研究課題名 ( 和文 ) 大学ファッション教育におけるデザイン教育に関する歴史的研究 - 今日の課題に向けて

研究課題名 ( 英文 ) Historical Research on Clothing Design Education in Universities: For Current Issues

研究代表者

鈴木 桜子 ( SUZUKI, Sakurako )

杉野服飾大学・服飾学部・教授

研究者番号 : 3 0 4 5 9 2 3 4

交付決定額 ( 研究期間全体 ) : ( 直接経費 ) 2,400,000 円

研究成果の概要 ( 和文 ) : 本研究の目的は、日本の大学ファッション教育における創造的衣服製作にかかわるデザイン教育の取組について明らかにすることである。具体的な成果内容として 教育研究誌にみる意匠・デザインへの視点 教育図書にみるデザイン理論 理論教育と技術教育の統合性の問題を明らかにすることができた。これらは学会口頭発表として2件、論文・調査報告として2件発表した。また本研究に関する、第一次資料の蒐集およびその分析調査したものとして資料集として冊子にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の高等教育における「デザイン」をめぐる解釈はさまざまであり、理論と実践の繋がりに統合性をもった教育が行われているか課題は依然として残されている。しかし「ファッション」と「デザイン」は人間生活に欠かせない最も身近なものであり、科学技術、経済、社会の発展と変化に応じて常に課題解決に向けられた関係にある。「ファッション」や「デザイン」が人間の生活を豊かにするものとしてある限り衣服製作の創造的表現の背後にはデザインの思想と理論が存在する。日本が和装から洋装へと衣文化を大きく変えて漸く100年を迎えようとする今日、衣服のデザインを改めて解釈し、そこから得る示唆は大きい。

研究成果の概要 ( 英文 ) : This study aimed to clarify the design education approaches to creative clothing making in Japanese college fashion education. The specific results of this study include (1) perspectives on design in educational research journals, (2) design theory in educational books, and (3) the issue of integration between theoretical and technical education. These results were presented in two oral presentations at academic conferences and two papers and research reports. In addition, I collected primary data related to this research, analyzed and investigated them, and compiled them into a booklet as a document of data.

研究分野 : 西洋服装史、近代デザイン史

キーワード : デザイン教育 ファッション教育 洋裁 意匠 被服 家政学 女子教育 新制大学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本の大学ファッション教育における創造的衣服製作のデザイン教育に関して、以前より専門家や実務家たちの間でそのあり方や教授法についての課題が問われてきた。それは衣服デザインのための発想から製作に至るプロセスの中で、デザインに求められる統合的な視点が明確にされずに分断化されてきたことを示す。そこにはデザイン教育に向けられた学術的研究が積極的に行われてこなかった状況があった。その背景のひとつに裁縫に関わる技術教育の専門家の多くが同時にデザイン教育の側面を担ってきたという経緯がある。しかし戦前・戦後の洋裁学校創立者たちや関係者らによってデザイン教育の重要性は当初から言われていたことであった。またもうひとつの背景には、現在の「ファッション教育」が明治・大正時代からの「裁縫教育」「洋裁教育」から戦後、女子専門学校が新制女子大学として昇格して「家政学部」「被服学科」の学部学科構成となっていた中で、女子教育の枠組みに留まるかたちとなった点が指摘される。つまり、創造的衣服製作を研究課題として大学教育の中で取り組む際にデザイン教育が曖昧な位置づけとしてあったということである。

## 2. 研究の目的

本研究は日本の大学ファッション教育における創造的衣服製作にかかわるデザイン教育の取組について歴史的に明らかにするために以下の3点を目的の中心においた。

### (1)衣服デザインの理論がどのように捉えられ試みられてきたか

形態としての衣服デザインの構成要素となる素材・色彩・形態・技術について、かつて和装で生活をしてきた日本人が洋装に移り変わる際の視点の持ち方はどうであったのか検証した。

### (2)理論教育と技術教育の統合性の問題

創造的衣服製作の実際では理論的な理解が技術を伴う製作にどのように結びつくのか、しばしば理論と技術の統合性の難しさが指摘されてきた点について検証した。

### (3)教育制度におけるファッション教育とデザイン教育の関係

大学におけるファッション教育への流れは、女子教育としての裁縫教育、洋裁教育から発展してきたものと、新制女子大学の設立で新たな学部構想の中で家政学学部・被服学科として教員養成、学術研究を目的に掲げたものがある。教育制度の変遷がファッション教育にどのように影響し、デザイン教育の位置付けがされてきたのかを検証した。

以上を歴史的観点で研究するファッション教育に特化した研究事例は無く、本研究によって日本の大学ファッション教育におけるデザイン教育の今日的課題の背景が明らかとなり、今後の教育の発展的改善に繋げていくことができる。

## 3. 研究の方法

本研究で対象とした時代は、最初に意匠・デザイン関連書籍が刊行された1925年から学制改革による新制大学の誕生を経て、衣生活において家庭洋裁から既製服を主とする時代へ移行をはじめた1960年頃までとした。

研究方法として、「研究の目的」で述べた(1)衣服デザインの理論がどのように捉えられ試みられてきたかについては、洋裁教本・教科書の分析とその著作者(技術教育者、意匠理論家)の調査を行い、技術教育・デザイン教育の捉え方を明らかにした。(2)理論教育と技術教育の統合性の問題については、これまで度々議論として取り上げられてきた意匠理論家と技術教育者双方で抱えてきた教育上の問題について、当時の研究教育雑誌から調査し、具体的な問題の所在を明らかにした。(3)教育制度におけるファッション教育とデザイン教育の関係については、文部省の関連資料、被服関連学科を持つ各大学の調査を通して教育制度と大学における実際について明らかにした。以上の調査・研究にあたっては、一次資料として教育研究誌及び洋裁教本や教科書等の教育図書の蒐集、調査対象とした高等教育機関の学園誌や関連資料の調査、また被服教育・意匠教育に携わってきた教育者・関係者へのインタビュー調査を実施した。

なお、コロナウィルス感染症拡大によって研究遂行に大きな影響が出たため、当初予定していた各大学の調査、関係者へのインタビュー調査を縮小し、研究方法の一部を文献調査に切り替えている。

## 4. 研究成果

### (1)教育研究誌にみる意匠・デザインへの視点

日本における洋裁教育は、明治以降、女子教育の中心であった家事及び裁縫教育の中で洋裁技術を身につける技術教育からはじまった。当初、西洋衣服を模倣して作っていくことに重きが置かれ、デザインに関する教授や、それを理論的に捉える向きには至っていない。しかし日本の近代化が推し進められていく1930年代、40年代では理論書に近いものや関連読本として刊行されるものもあり、デザインへの意識の高まりが見られていった。それは西欧の模倣に依らない日本の衣服デザインを生み出していくための、衣服の美的理解と創造的衣服に向けられたものであった。これら関連書籍は裁縫学校、女子専門学校で教授の立場にあった意匠理論家や美術家、裁

縫家らによって著され、洋裁教育から被服デザイン教育への脱却を示す動きにもなっていった。さらに戦後の学制改革で女子の新制大学の設置が認められるようになると、被服領域においても教科書が必要となり、被服意匠・デザインの分野として関連書籍が刊行されていった。一方で教育研究誌から意匠・デザインへの関心を辿っていくと、「家事及裁縫」(東京家事講習所)では1927～1936年にかけて意匠(デザイン)に関連する内容を扱う記事が少なからず掲載されていることが明らかになった。第1巻3号(1927)に掲載された木田翠明の「裁縫教育の現状と其将来に就いて」では、型に当てはめられた技術教育から洋服の自由なデザインとアイデアによって製作者自身で表現していくための教育の在り方が問われている。そして1947年以降、「家庭科教育」(家政教育社)、「被服文化」(被服文化協会)等、教育研究誌の刊行数も増えていった時代、1950年代初期にかけては教育研究誌において意匠・デザインに関する「理論」が占める割合の推移は、新制女子大学の相次ぐ創設時期と重なっていることが明らかとなった。この時期には、牛込ちゑ、宮下孝雄、中田満雄らによって各誌でデザイン理論に関する連載があり、それらを前後して彼らによる教育図書の刊行も相次いだ。被服教育が裁縫教育からの流れの延長上にあり、技術教育が中心に行われてきた経緯からも被服を学として位置づけていく中で、これまでになかった被服のデザイン理論が打ち立てられていった。

#### (2)教育図書にみるデザイン理論

洋裁・被服領域における教育図書に見られたデザイン理論の内容は、デザインとは何か、という定義から始まるものが多いが、著者によってデザインの理論構成としての視点はそれぞれ異なるものであった。ここで一部事例を挙げれば、『婦人服子供精義：ディザイニング』(国民図書刊行会、1949)を著した牛込ちゑは、衣服としてのデザインについて、当時の洋裁教育では見た目の外見の問題として捉える傾向にあったものとは異なり、社会との関係性の中で衣服を捉えていく考え方を示した。「デザイン」が形態や色彩の問題に陥りやすい視点とは異なった見方である。そして牛込はデザインを理論として捉える必要と重要性を次のように述べている。「洋服に對しては未だ経験がないばかりではなく、外人に適したものを氣候風土を異にし、体格氣質等にも少なからぬ差を持つ我々が、直ちに模して用ひることは出来ないのであるから、先ず理論的に考究して、洋服を批判し解剖し、よきを取り、悪しきを捨てて、我々に適したものとしないで、これを單に経験のみに頼って為すならば、少なからぬ年月と勞力とを空費することは、裁縫の技術が單に練習の効果ばかりによるのと、科學的研究の上に立つて練習するのとでは、その進歩の程度と遲速とに非常な相違があるのにも見ても明瞭なことである。」(同書 p.8.) このことから、裁縫技術とその練習、経験よりも科学的な見地でデザインの理論を捉える事を重視し形態としての衣服デザインに繋げようとしていたことがわかる。さらに別の事例として、『被服デザインの原理と応用』(光生館、1951)を著した宮下孝雄は、その背景にアメリカニズムの模倣があることを問い、序文には「溢れる程あるスタイルブック 昨日の本は今日の本として役立たない。そしてそれはたゞ單にスタイルを見るだけでスタイルを作り出すものではない。つまり自分の心にスタイルを生み出す力がないから、たゞ人の眞似のみに生きようとすることになる。デザイナーには眞の底力を必要とする。それはスタイルブックだけでは培われない。」(同書、序)と述べ、スタイルを生み出すためには「その原理をつかんでじっくりと考える要素がなければならない」として「基礎知識」と「應用部門」の2構成とし、服飾デザインの原理となる形態、色彩を科学的見地で論理的に捉え、衣文化形成に関する素養と合わせて実際の服飾デザインに應用するという視点で著している。

#### (3)理論教育と技術教育の乖離

洋裁・被服教育におけるデザイン教育の問題については、教育研究誌上でも度々議論が繰り返されてきた。昭和初期に見られた具体的な記事タイトルをあげれば1927年の本間良介による「創造主義裁縫教授法の主張」、それに対する山本キクによる「創造主義裁縫教授批判」の寄稿はその後「家事及裁縫」誌上で2年間に及ぶ議論となった。その内容は、本間が型にはあてはめられた一律の一斉教授ではなく創造性を重視する教授法への見直しを主張するのに対して、山本が裁縫教授の實際に伴わない芸術論にすぎないと批判するものであった。これは本間が武蔵高等学校の図画教育の教授であり、山本が東京女子美術学校で裁縫教育の教授、東京市視学官であった立場の相違からの議論でもあった。さらに別の事例をあげれば1956年の石山彰による「服装デザイン教育の再検討」(「服装文化」41巻45号)では、戦後新制女子大学が発足してから10年近く経ち、これまでの被服教育、デザイン教育が反省期に立たされていることを自問する論稿がある。これは意匠学・色彩学・造形美学等の課目が洋裁・被服教育に置かれるようになったものの、技術教育共に連関性なく「服装とは何か」を問わずに勘やセンスに頼る実状から教育現場の体制を問いただそうとするものであった。このようにそれぞれの専門の立場による見識は後に著される教科書などの著作にも表れることとなった。しかし意匠・デザインに関わる「理論」は「応用と実践」に繋げる展開へと示されるものの、製図や縫製に関わる「技術」、すなわち平面から立体に展開される視点にまで至らない部分もあり、そこに理論と技術の乖離が生じることになった。そして実際に衣服デザインが感覚的な嗜好で色や形として表現することも可能である点で、理論的思考よりも欧米で見られる流行のデザインの模倣が依然として行われていった。

#### (4)女子新制大学における被服教育と意匠・デザイン教育

戦後1946(昭和21)年の学制改革により、旧制専門学校から新制大学への昇格の動きは女子にも向けられることになった。文科・理科と既にある学科系統に女子教育特有の領域として高等教育の中に新たに生まれたのが「家政」教育である。もともと「家政」という語は明治時代に表

れた新語であり、「家事」の概念と結びついた女子を対象としていたものであった。この「家政」が学校教育制度上に現れたのが 1910（明治 43）年のことであった。戦後、新制大学において制度上に「家政学部設置基準」が設けられ最終的に家政学部が大学の学部として設置されるに至る背景にはアメリカの GHQ / CIE の指導もあり、大学昇格に向けての推進組織、家政学部設置基準を検討する組織委員会との間で論議が繰り返された。

1947（昭和 22）年 8 月、大学設立基準設定協議会主導のもとに制定された家政学部設置基準では、児童学科、食物学科、被服学科、住居学科、社会福祉学科、施設経営学科の 6 学科が置かれ、そして家政学部の学科組織に示された被服学科では、学課程に、造形美学、服飾美学、被服文化史、紡織学、染色学、被服衛生学、被服商品学、被服工作、被服整理、研究問題 意匠学（選）、色彩学（選）、服飾工芸史（選）が置かれた。この中で「意匠学」は選択課程として、主要課程ではないことを示している。しかし大学設置基準においては「学科に於いては専攻課程として挙げるものが必要である、但しそれらを適当に分けても又合わせてもよく、更に各大学の主眼とする趣旨に応じて適当な科目（例えば " 選 " と記したものの如き）が加へらるゝことが望ましい。」とあり（林、1970）、各大学の教育目的によってカリキュラム構成は随分と異なっていた。こうして被服学の一課程となった意匠学として理論が求められ、教科書が刊行されていった。

新制女子大学の家政学部被服学科の設置にあわせるように刊行された「意匠」に関する教科書を検証すると、科学的な見地でデザインの理論を捉える事を重視していることが明らかであり、実際にも科学的な原理に則った記述内容には理論書として位置づけされていることが明らかである。「意匠（デザイン）」が「学」として教科書に示されることは、「被服」の領域が「学」として成り立ち得ることを示すことに繋がる。事例として前述した牛込ちる、宮下孝雄による著作には顕著にその傾向が見て取れた。しかし先述したように実際の被服製作において、理論から実践へと応用発展に繋がるには隔たりがあったことも、当時の教授、専門家らによる被服教育に関する議論や論考からも明らかとなった。

#### (5)今日の課題に向けて

ここに示した研究成果は洋裁・被服教育、意匠・デザイン教育に関わる歴史的側面の一部にあたる。そして現代の高等教育においても「デザイン」をめぐる解釈はさまざまであり、理論と技術を伴う実践的繋がりに統合性をもった教育が施されているのか問題は依然として残されている。しかし「ファッション」と「デザイン」は人間生活に欠かせない最も身近なものであり、科学技術、経済、社会の発展と変化に応じて常に課題解決に向けられる関係にある。「ファッション」や「デザイン」が人間の生活を豊かにするものとしてある限り、衣服製作の創造的表現の背後にはデザインの思想と理論が存在する。日本が和装から洋装へと衣文化を大きく変えて漸く 100 年を迎えようとする今日、衣服のデザインを改めて解釈し、そこから得る示唆は大きい。

注：鈴木桜子「教育研究誌にみる被服デザイン関連記事」（杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 20 号，2022）／鈴木桜子「教科書にみる被服デザイン理論 新制女子大学創設期をめぐって」（杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 21 号，2023）より抜粋

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鈴木桜子	4. 巻 20
2. 論文標題 教育研究誌にみる被服デザイン関連記事	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要第20号	6. 最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木桜子	4. 巻 21
2. 論文標題 教科書にみる被服デザイン理論 ―新制女子大学創設期をめぐる―	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要21号	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木桜子
2. 発表標題 被服教育におけるデザイン教育への視座―新制女子大学設立時を中心に
3. 学会等名 服飾文化学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木桜子
2. 発表標題 服飾教育におけるデザイン理論の系譜
3. 学会等名 服飾文化学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------